過去としての時

――フランクルとハイデッガーの時の思想――

芝田 豊彦

ハイデッガー全集第一三巻『思惟の経験から』には、ヘーベルに関する著作が何篇か収録されている。しかしそこには、ヘーベルの最も知られた物語――エルンスト・ブロッホが「世界で最も美しい話」とさえ評した物語――についての言及がないので、ここで簡単に紹介することによってこの小文の導入としたい。

それは「思いがけない再会」という短い物語であり、実際にあった出来事に基づいている。一人の坑夫が炭坑で事故にあって遭難したのであった。遺骸は見つからず、花嫁はひとり残され、その事故もやがて忘れられる。しかし五十年の後に、偶然に遺骸が発見される。遺骸は緑礬水がしみ込んで腐敗を免れ、坑夫はほとんど生前そのままの姿で見つけられたのであった。花婿は若々しさを保っているが死んでおり、花嫁はかつての面影もない老婆となっているがそれでも生きている。この対照的なふたりの姿は我々の涙を誘う。しかしここで注目したいのは、ヘーベルの「時」の扱いである。

ヤン・クノップが指摘しているように、この物語には三つの「時」が扱われている。クノップの記述に拠りながらも、私の視点からこの三つの時を再現してみよう。先ず第一の時は、若者が許嫁の花嫁に朝の挨拶をして、炭坑に出かけた後の叙述を支配する。坑夫は戻らず、花嫁にとって時間は止まってしまう。人生の非連続性が、「もはや〜ない」という文構造に規定された文が並ぶことによって表わされるのである。第二の時は、歴史的事件が順に羅列されることによって表わされる。歴史的事件の羅列によって、実に巧みに五十年が架橋されるのである。ここでの時は、歴史的連続性、謂わば過ぎ去りとしての時である。しかし過ぎ去りだけが、時の姿ではない。農夫の日常的な時、ヘーベルの暦物語が戯せられている暦が指し示す時は、循環する時、円環的な時である。年々歳々春に種を播き、秋に収穫する、秋には植物は死滅するが、春になるとまた蘇る、そのような時である。これが第三の時である。この第三の時が導入されることによって、過ぎ去ったものが戻ってくる可能性が読者に示され、花婿が生前の姿そのままに発掘される場面に移行する。

ふたりの思いがけない再会の後に、抗夫はあらためて埋葬される。時は五十年前に戻り（第三の時）、それまで止まっていた時（第一の時）が再び動き出す（第二の時）。晴れ着に身を包んだ老婆は、かつて結婚式のために赤い縁飾りを縫いつけた黒いスカーフを、花婿の首に巻きつける。埋葬の日ではなく、あたかも結婚式の日であるかのように、とヘーベルは書いている。しかし、この三つの時で時の実相が尽くされるわけではない。この三つの時の根底に、仕合せな婚約の日々が実在していなければならない。過ぎ去ったにもかかわらず保存され、永遠化された日々として、彼女の前に実在しなければならない。生前さながらの花婿の遺骸は、ヘーベルにとってそのこと――過去の時の永遠性――の象徴ではなかったのか。

実はこの解釈は、ヴィクトール・E・フランクルの時の思想を適応したものである。フランクルとは有名な『夜と霧』（邦訳名）の著者であり、ロゴセラピーの提唱者である。彼は自らの立場を実存分析とも呼ぶので、実存哲学の影響を受けているであろうが、ビンスワンガーたちの現存在分析とは違って、ハイデッガーとの関係は必ずしもはっきりしない。

ここではフランクルが一九四七年に行なった『時と責任』という講演を用いて、フランクルの時の思想をハイデッガーとの関連で見ていきたい。この講演で先ず目立つのは、現存在分析と同様に、フランクルが人間ないし人間存在を「現存在」と呼んでいることである。そして人間の行動を社会的な原因に還元する社会学主義について、それが人間の「責任」を曖昧にするが故に、フランクルはその立場を拒否する。この立場では、人間は責任を取るのではなく、弁解するのであり、「ハイデッガーの意味におけるひと（das Man）」として言い逃れるのである。また神証明について、個人的見解としてであるが、所謂神証明が究極的には神の冒瀆であると主張して、そもそも証明できるのは、「単にオンティシュなもの、したがって世界内部的なもの、なんらかの仕方で自然の内にあるものだけ」であるとされ、更に、「神に帰せられるような存在の仕方の本質に到るのは、いずれにせよオンティシュな道ではなく、オントローギシュな道だけである」と言われる。神と有（ないし存在）を区別するハイデッガーの立場からは必ずしも精確でないかもしれないが、上に挙げたそれぞれの箇所は、ハイデッガー的な用語を用いたハイデッガー的な思想圏での発言であることは明らかである。

しかしながら時の思想においては、フランクルの思想はハイデッガーのそれを大きく逸脱しているように見える。フランクルによれば、創造や体験や苦しむために我々が持っている諸可能性が過ぎ去るにすぎないのであって、このような可能性が実現されるや否や、それらはもはや過ぎ去るものではなく、過ぎ去って在る、即ちその過去存在のうちに在るのである。もっと一般的に言うと、すべてのものは過ぎ去るが、永遠でもある。我々がそれを過去存在の中に運び入れる、即ち時間化（zeitigen）するやいなや、それは自ずから永遠化されるのである。我々の生のすべての営み、創造や愛や苦しみといったものすべてが、世界という「記録文書」に書き込まれ、保存され、永遠化されるのである。この記録文書は失われることはないが、訂正することもできない。したがって現在の瞬間において、何が永遠化されるか、何を過去-存在に運び入れるかという点において、我々の責任は極めて重大となる。フランクルの時の思想は、彼自身が言うように「過去の楽観主義」であるが、そこからは現在の瞬間における決断の重要性と共に、未来のアクティヴィズムも帰結するのである。

フランクルはまた、一年の結婚生活の後に夫に先立たれた戦争未亡人という興味深い例を挙げている。彼女は絶望して、将来の生活を無意味と見なしているのである。しかしながら、彼女はともかくも一年間の仕合せな結婚生活を送った、即ちその一年を過去存在のうちに救い入れたのであり、何ものも、また何人も、彼女がそれを

体験したという事実を彼女から取り去ることはできないのである。このように彼女を励ますことができる。しかしここで注意しなければならないのは、この一年が彼女の記憶に残っているから、それが永遠というわけではない、ということである。フランクルの例を挙げると、物は、それが我々に知覚されたり考えられたりすることによって初めて存立するのではなく、そのようなこととは無関係に存立する。それと同じように、上の事実が我々の意識から消え失せたとしても、その事実は永遠であり、不滅なのである。この戦争未亡人の例は、講演当時の世相を反映しているであろうが、この例に類似したヘーベルの「思いがけない再会」にフランクルの時の思想を適応することの妥当性を与えてくれるであろう。

このような過去存在に重点をおいた時の思想は、どこに淵源を持つのであろうか。フランクルは「過去存在」(Vergangensein)において存在(Sein)に強調を置くように指示しており、したがって「過ぎ去って在る」と読ませる。このことによって過去という時が永遠性と関連づけられることを確認しておきたい。また彼は「既在存在」(Gewesensein)という言葉も用い、既在存在が存在一般の最も確実な形式であるとする。しかも彼によれば、この言葉は「完了」の意味で用いられている。ヘブル語は事象を完了・未完了の相で見ていくが、これとの関連で「完了」という言葉が使われているのだろうか。いずれにせよユダヤ教の神は歴史の只中に顕現し、行為する、或は神と人との関わりが、歴史として聖書文書に記録されると言ってもよいが、歴史はユダヤ民族にとって単なる過去ではないのである。既に完了した歴史は、永遠性を帯びつつ現在に面し、更に未来へと向けられている(ザラデル『ハイデガーとヘブライの遺産』参照)。このようなヘブル的な歴史の見方が、フランクルの時の思想に影響しているのではなかろうか。

ハイデッガーの『存在と時』においては、周知の通り、現存在の存在の意味としての「時性」は、将来・既在性(Gewesenheit)・現在という脱自態の統一として実現する。これら脱自態は緊密に結びついているが、「死への先駆」に対応する将来が他に優位する。したがってヘブル的な終末論的時間観との類似も指摘される。それは勿論間違いではないが、むしろコロサイ書二―三章やロマ書六章で展開される「キリストと共に死に、キリストと共に蘇る」というパウロ的思想と関連づける方がより事態に即しているのではなかろうか。キリストとの実存的な同死同生という思想を、存在論的・実存論的に換骨奪胎した「時」の思想が、脱自的統一としての時性ではなかろうか。そこでは死への動性(将来)と生への動性(既在性)が、円環的・相補的に同時発動するという絶対現在論が展開される(古東哲明『ハイデガー=存在神秘の哲学』参照)。ハイデッガーのこの動的な時性は、時の根源化であって、けっして時の永遠化ではない。プラトンやアウグスティヌスに依拠した時間論では、現在の瞬間は「とどまる今」(nunc stans)となり、結局のところ時は撥無されて静的な永遠に還元される。それに対して、フランクル自ら主張するところによれば、現在の瞬間に集中する実存哲学的な時間論に対して、静寂主義的な時間論(永遠論)に陥ることなく永遠性を回復させたのが、彼の時間論ということになろう。

それにしても『哲学への寄与論稿』等におけるハイデッガーのユダヤ教・キリスト教批判はあまりに手厳しい。しかしハイデッガーの「存在」が隠れることによって現れることを根本動向とするならば、イザヤ書の「隠れたる神」も同一の方向にあるはずである。また神名ヤハウェが動詞ハーヤー(在る、成る)から派生することを考慮すれば、ヘブル的な神はギリシャ的な実体的存在などではなく、むしろハイデッガーの存在論に思いのほか近い。原因―結果、或は主観―客観という図式に支配された「最も完全な存在者」というキリスト教的な神観の批判という意図は分かるが、彼のユダヤ教・キリスト教批判は或る意味であまりに一方的である。確かにハイデッガーの言う「存在」はこの図式で捉えることはできないが、同じくそのような図式で捉えることのできないのが我―汝の関係である。フランクルにおける神は、そのようなヘブル的な人格的神であり、「根源的な汝」(Ur-Du)なのである。

以上述べてきたように、ニュアンスは異なるにしてもユダヤ教思想との親近性ということに、ハイデッガーとフランクルの本質的な共通性を見つけることができるのではなかろうか。全集第一三巻でハイデッガーは神の死に関連してニーチェの興味深い言葉を引用している。これを挙げてこの小文の終わりとしたい。「神の否定――本来ただ道徳的な神のみが否定されるに過ぎない。」(一九二頁)

(しばた・とよひこ　関西大学文学部教授／ドイツ文学・思想)